

「オイ、そない震いないナ。僅かな物や、一人前（ひとまへ）や」

「ア、三百文か」

「阿呆。假りにも藝妓を乗せて船行きするのやで、三百や四百の錢で往けるかいナ。三分や。」

「ギエツ、三ツ。三ツ。三分ウツツ。」

「オツ。眼剝いたナ。」

「剝かいでかいナ。俺（わが）い等ア職人や、三分の錢儲け様と思ふたら幾日かゝると思ふね。」

「そんな事云ふたら御互ひ誰かてや。併し儲けるのは毎日遣ふのはタマや。オイ、何時も人の尻に隨いて歩いて饗應（おごち）れるのが能や無いで。偶（たま）には自前の酒も飲で見い。味が違ふで。」

「そら左様やろけど割前（わりまえ）が辛い。俺（わが）い等喚と二人暮しや、三分が處鹽買ふといたら何年有るやら解れへん」

「お前に話してると痛（いた）が立て來る。藝妓連れて散財すると鹽買ふて甜（あま）ると大分話が違ふワ。まアお前は鹽甜（あま）つて仕事してエ。俺（わが）い等ア活きの良え鯛（たき）の刺身（さしみ）で灘（な）の生一本をチビく飲み乍ら、涼しい風に吹かれて綺麗な女に背中の一つも叩かれて來ふかい。マ左様（さやう）なら。」

「待つたくく。チョツと清やん。もう一遍お戻り。そない氣イ短ふせんと、まアお戻り、モシモ

ン」

「古着屋やがナ全（まる）で。何やねナ。」

「皆が面白ふ遊びに往くなアと思ふと仕事（しごと）が手に附かんワ。」

「そんならお前も往きイナ。」

「左様やけど割前（わりまえ）が三分ちウとなア。ウーム矢つ張り止めとくワ。」

「止めるのなら呼び留めない。辻を曲りかけてるのに呼び戻しやがつて。」

「往たら面白いやろなア。」

「船に揺られて白粉の匂ひ嗅いで見い、三年位ひ壽命延びるで。」

「ア、往き度いけどなア。何しろ三分と云ふのやさかい……。」

「止めとくか。」

「エ、イ。清水の舞臺から飛（と）だ思ふて。」

「往くか。」

「止めとく。」

「止めるのに清水の舞臺から飛ぶ事が有るかイ。コラ粕（かす）ツ。これから途中で逢ふても物言ふて呉れナお前等見たいな友達（ともだち）が有たら人にも面目ない哩。唇見て良え日が有たら眼瞞（ま）んで死で仕舞え。」